

原著論文

## 新興国競技大会（GANEF0）に参加した水球チーム

富田幸祐

オリンピックスポーツ文化研究所

### The Memory of Tokyo Water polo club participated in the GANEF0

Kosuke Tomita

**Abstract:** This paper clarifies the participation history of Tokyo water polo club that participated in the Games of the New Emerging Forces (GANEF0), based on the descriptions found in two commemorative journals that had been compiled by the team.

Tatsukuni Toyama, who was chosen as the captain of the GANEF0 Japanese team, asked Atsushi Igata, a friend from his university years, for help. Then, Igata, who was a member of Keio University's water polo team, introduced his teammate, Ken Yamamoto, to Toyama. Yamamoto was willing to cooperate, despite being perplexed by their request, and approached the 58 Club (to which Naotake Sugahisa and others belonged) about participating in the GANEF0. Upon internal consultation, the 58 Club, which included Tokyo Olympics candidate athletes, decided to form a team with non-Tokyo Olympic candidate athletes for the purpose of participating in GANEF0. Although the participating members already had fulltime work, when they verified with their companies about participating in GANEF0, most were allowed to take a leave of absence for more than a month, and some companies even gave the athletes parting gifts. However, pressure was placed on some of the members, and both Igata and Yamamoto were unable to join. As a result, the water polo team added Koji Fusano as a replacement, bringing the total number of players to 12. The team was then named the Tokyo Water Polo Club, submitted its resignation to the Japan Swimming Federation (JASF), and joined GANEF0. The water polo team arrived in Indonesia, where GANEF0 was held, and were able to practice despite having to adapt to life in a foreign country. In addition, exchange sessions with local Indonesian people as well as social gatherings with local Japanese residents were also held. Four teams participated in the water polo competition. The Japanese team lost to Indonesia and came in second, overall. On the plane back home, Sugahisa had the team members write down their thoughts on the future. Each athlete's opinion can be summarized into the following two points: 1) to return to the JASF, and 2) to continue holding regular meets in the future. The JASF's National Board of Directors' meeting as well as the Regular Meeting of Delegates, held in February 1964, confirmed the expulsion of 12 members who participated in GANEF0. The expulsion was lifted in October 1972.

**抄録:** 本稿では、新興国競技大会（以下、GANEF0）に参加した水球チームの参加経緯について、彼らによって編纂された2冊の記念誌等の記述を基にして明らかにした。

GANEF0日本選手団の団長に選ばれることになる頭山立国は大学の友人である井形敦に協力を依頼した。慶應義塾大学の水球チームに所属していた井形はチームメイトの山本健を頭山に紹介する。頭山から協力を依頼された山本は戸惑いつつも承諾し、菅久尚武などが所属する58クラブにGANEF0参加話を持ち掛けた。東京オリンピック候補選手も所属していた58クラブでは、協議の結果、東京オリンピック候補選手以外でのチームを編成することを決めた。参加メンバーは既に社会人となっていたが、会社にGANEF0参加を確認した所、1か月以上の休暇を許可し、なかには餞別をくれるところもあった。一方で参加メンバーの一部に対し圧力がかけられ、井形と山本は参加することができなくなった。水球チームは代わりのメンバーとして房野康滋を追加し計12名となった。そして東京水球クラブと称し、日本水連に脱退届を提出して、GANEF0に参加したのである。大会開催地であるインドネシアに到着した水球チームは、異国の地での慣れない生活に苦勞しつつも練習を行った。またインドネシアの現地の人びとの交流や在留邦人との懇談なども行われた。水球には4チームが出場した。水球チームはインドネシアに敗れ、2位であった。帰国の機内で、菅久はメンバーに対し、自分たちの今後について意見を書かせた。各人の意見は次の2点に集約される。一つ目は日本水連への復帰、二つ目は今後も定期的に会合を催したいということであった。1964年2月に開催された日本水連の全国理事会、そして定例代議員会議においてGANEF0に参加した12名の除名処分が確定した。この除名処分が解除されるのは1972年10月のことである。

(Received: May 25, 2021 Accepted: July 2, 2021)

**Key words:** Indonesia, The Games of New Emerging Forces, 58 club

キーワード: インドネシア, ガネフォ, 58クラブ

## はじめに

1963年11月、インドネシアのジャカルタで新興国競技大会（以下、GANEFO）が開催された。ジャカルタで1962年に開かれた第4回アジア競技大会で、中華民国（台湾）とイスラエルの選手団がインドネシアに入国できない状況に陥った。これはインドネシアが中華人民共和国やアラブ諸国との友好を深めていることから、両国の大会参加を政治的に拒否したものと考えられた。IOCや国際陸上連盟（以下、国際陸連）といった国際スポーツ界はスポーツを政治的に利用する行為であるとしてインドネシアを非難し、1963年2月のIOC理事会でインドネシアに対しオリンピック・ムーブメント資格停止処分が下された。この処分後にインドネシアが発表したのが、GANEFOの開催であった。IOCはGANEFOの存在に懸念を示し、国際陸連や国際水泳連盟（以下、国際水連）といった国際競技団体は加盟する各国の協会にGANEFOに参加しないよう警告した。GANEFOはスポーツを政治的に利用するインドネシアの思惑を具現化したものと捉えられ、開催は好意的に受け取られていなかったのである。しかし大会には51の国・地域から2700人ほどの参加があった<sup>注1)</sup>。

インドネシアは日本にもGANEFO参加を要請し、当初打診を受けたのは外務省であった。このことはインドネシアがGANEFOを単なるスポーツ大会としてだけでなく、政治的な課題として日本に対応を求めていたことの現れであった。しかし外務省はスポーツと政治は別であるという原則から回答はせず、日本体育協会（以下、日体協）に参加の判断を委ねた。日体協は、GANEFOの性格が政治的であること、翌年に東京オリンピックの開催を控えていること、また会期が東京国際スポーツ大会の直後であり日程的にも現実的ではないことから不参加を決めた。ところが日本からの参加は実現することになる。頭山立国を団長として日体協を派遣母体としない形で計画が進み、結果的に10競技<sup>注2)</sup>と芸術部門に選手役員合わせて100名弱の選手団が結成されることになった。この日本選手団の結成は、インドネシアとの関係が深い人物を基点として行われたことが先行研究によって明らかにされている。実際に選手集めに奔走した宮澤正幸によれば、空手、柔道、レスリングの選手集めを担当したという。これは、GANEFO日本選手団の最高顧問を務めた柳川宗成から依頼されたものであった。柳川は元陸軍中尉であり、アジア・太平洋戦争ではオランダ領東インド（インドネシア）にて諜報活動等を行っていた。戦後はインドネシアと日本をつなぐ仲介役として活動しており、そうした背景から日本選手団結成を依頼され

る。柳川は日刊スポーツの記者であり、同じ拓南会（拓殖大学インドネシア研究会関係者による団体）のメンバーであった宮澤にその準備を依頼したのである（宮澤、2005）。また浦辺によれば日本選手団の団長を務めた頭山立国が関係者に声をかけて選手集めを行ったことを指摘する（浦辺、2013）。富田は、宮澤や頭山の他に、日本アジア・アフリカ連帯委員会、日本共産党、日本民主青年同盟、日本社会主義青年同盟といった団体による選手集めを指摘し、多様な選手集めのルートの存在によって100名に近い選手団が結成されたこと、さらに選手団結成をめぐるこうした状況は、結果的にGANEFO派遣の日本選手団の陣容が右翼系から左翼系に至る政治的思想的に多様な編成となったことを論じた（富田、2018）<sup>注3)</sup>。このように柳川—宮澤のルートの他にも日本選手団結成に尽力した人物、そして団体が存在したのである。

GANEFOへの参加は日体協を派遣母体としないという特殊な状況の中で実施されたものであった。日体協が参加しないとはっきりと明言する中で、なぜ選手たちはGANEFOへの参加を決め、そしてなぜ参加は可能だったのか。さらには日本選手団が100名近い人数となったのにも関わらず、その派遣を可能としたのはなんだったのだろうか。選手集めの多様なルートの存在、政治的思想的に多様な構成であったという事実は、それぞれに参加の事情があることを意味する。しかし、柳川—宮澤のルート以外は、どの競技種目がどのルートによって選手集めが行われたかについては明らかとなっていない<sup>注4)</sup>。そこで本稿はGANEFOに参加した日本選手団の内、水球チームの参加について明らかにすることを目的とする。

主な史資料はGANEFO終了後に書かれた水球チームの決意文、そして2冊の記念誌（『懐かしのガネフォ（GANEFO）[ガネフォ50周年記念改訂版]』及び『ガネフォ1963への想い』）を用いる。この2冊の記念誌を作成したのは日本水球チームとガネフォ会であるが、どちらも本稿が取り上げる水球チームのことを指す。記念誌はどちらもGANEFOに参加した際の出来事について記述されていて、本稿ではこれらを手がかりとして彼らのGANEFO参加の経験を構成する。

## 1. 水球チームの選手集め

上述の通り、GANEFO開催に際し、日本にもインドネシアから参加の打診があった。正式に招待状が届けられたのは1963年8月13日のことで、インドネシアのウバニ公使から、外務省アジア局長の後宮虎男に手渡された。外務省ではGANEFOの参加可否の判断を日体協に委ねる。外務省から参加可否を委ねられた日体協では、8月28日のJOC総会、9月4日の日体協

理事会を経て不参加を決した。9月10日、外務省から在日インドネシア大使館に対しGANEFO不参加の回答が伝えられたのである(富田, 2018)。そして日体協は各競技団体に対してGANEFOに選手を派遣しないように要請した(朝日新聞, 1963a)。

### 1-1. 頭山立国の GANEFO 日本選手団団長就任

GANEFOに参加する水球チームの選手集めはGANEFO日本選手団団長を務めた頭山立国が基点となって行われた。頭山立国は戦前にアジア主義者として活動をしていた頭山満の孫にあたる。頭山がインドネシアと関わるようになったのは、兄の統一が慶應義塾大学にて「東南アジア学友会」を立ち上げたことによる。兄の卒業後の1958年に、この団体を引き継いだ頭山は1959年に「アジア・アフリカ・インドネシア留学生会議スダルトノ代表」(頭山, 2019, p. 6)から日本の企業視察の依頼を受けて彼らの来日時に視察旅行をさせた。翌1960年には招待を受けてインドネシアを訪問している。こうした中で「双方の信頼関係、友情が構築され、その間駐日インドネシア大使をはじめとする、大使館員とも自然体で相互の信頼が培われ」(頭山, 2019, p. 6)、インドネシアとの関係を深めていた。そんな頭山に対しGANEFOの話が舞い込んでくる。在日インドネシア大使館から連絡もらった頭山が大使館に出向くと他にもインドネシアとの関係性が深いと思われる人物が集まっており、その席上で、GANEFO開催と日本からの選手派遣を要請された。そして頭山は「選手団結成と選手選考には、体育関係者との繋がりが考慮され、最も年齢の若かった私が適任と判断され団長の任をお受けすることになった…私には日本がこの要請に応えぬ事があってはならない、の強い思いがあった」(頭山, 2019, p. 6)という。なお頭山がインドネシア大使館に出向いた時期は記念誌の記述では定かではない。ただ頭山とは別に選手編成をしていた柳川は9月6日には動き出している(宮澤, 2005, pp. 30-31)。また他の資料によれば10月4日に在日インドネシア大使館にて、頭山やその他の関係者がGANEFO第二副委員長のS・H・スパルドと会談したことが明らかとなっている(戦後外交記録, 1963)。

団長となった頭山は選手集めに掛かる。そこで頭山が相談したのが慶應義塾中等部からの友人であり慶應義塾大学では水球チームに所属していた井形敦であった(頭山, 2019, pp. 5-6)。

相談を受けた井形は、大学の時のチームメイトでありローマオリンピックに出場した山本健を頭山に紹介する。山本は、頭山から「当時の日本が必要としている」アジア諸国との国際親善に関する説明を受け

「スポーツ分野でそれが役立つ事に意義を感じ」(山本, 2014, pp. 1)選手団結成に協力することを決めた。

### 1-2. 山本健の協力と 58 クラブによる選手編成

とはいえ、頭山から協力を依頼された山本は、ローマ大会の水球代表選手として選出されていたことからGANEFOに「共鳴することに複雑な思い」(山本, 2014, p. 2)があった。ただ「東京五輪を目指す練習で監督から、次のキーパーを育てるからお前は来なくてよいと言われ、かなり不満が高じていた」(山本, 2014, p. 2)こともあり、「鬱積したもろもろの感覚を抱えつつの『ガネフォ』の話であった」(山本, 2014, p. 2)ことからGANEFOへの協力を引き受ける。山本は、「菅久→浜野→日大、成城、法大と58クラブラインも使って」(山本, 2014, p. 2)選手集めを行う。そして選手たちが集まれる場所として練馬区江古田にアパートを借りた(山本, 2014, p. 1)。

菅久尚武と浜野武人は中央大学の水球チーム出身の人物であり、菅久はこの時のことを次のように回想する。

慶大OBから重大な話があると招集がかかり新宿のアサヒビアホールにクラブの有力選手全員が集まった。唯一、中国との公式窓口であった日中友好協会が、ある人を通して、インドネシアで開催される第1回新興国スポーツ大会に日本から選手団を送れないかと打診して来た(菅久, 2014b, p. 16)

そして菅久はこの打診を受けることになる。引き受けた理由について、インドネシア滞在中に書いた手紙に次のように書き残されている。

ガネフォに参加するのは、IOCは19世紀の性質と精神を持続し、機構組織はもはや20世紀の時代の要求に適応しない旧態依然としたものであります。同じように日本におけるスポーツ団体も中央集権的、封建的なものでしかありません。アマチュア選手とは、自由にスポーツを楽しむ個人の権利でありながら、現在は連盟という名のもとに選手を「制約」する一部の人による圧力団体となり、アマスポーツ本来の精神を見失いつつあります。私達東京水球クラブがガネフォ大会参加にふみきった動機は、これらいろいろの問題を考えた末、一部の「非難」を受けても必ずや世界の、日本のスポーツ界は新しい世界の「鼓動」に目覚めるものと信じ、その少ない「布石」となればと考える気持ちが強かったからであります(菅久,

2014a, p. 13)

「旧態依然」としたスポーツ界を変える、その「布石」とならんために GANEFO への協力を菅久は決めたと語る。菅久は GANEFO 参加の水球チームの中心人物として活動することとなる<sup>註5)</sup>。

そして山本が挙げた「58クラブ」こそ、GANEFO に参加した水球チームの母体である。このクラブは中央大学、日本大学、慶應義塾大学、成城大学、法政大学の水球チーム OB で結成されたクラブチームのことである。菅久が語るところによれば「国内最強の水球チーム」(菅久, 2014b, p. 17) であり、1964年東京オリンピックの代表選手もこのクラブから選出されることとなっていた。菅久、浜野もこの58クラブに所属していた。GANEFO に参加する水球チームの編成は58クラブにおいて協議され、独自に選考会が行われた(菅久, 2014b, p. 17)。その結果東京オリンピック出場組以外でメンバー編成することとなり、「中央大出身4名、日本大出身3名、成城大出身2名、法政大出身2名、慶応大出身1名」(村上, 2019, p. 56) による12名のチームが編成されることとなった。

### 1-3. GANEFO 参加に至る各選手の回想

頭山、井形、山本、菅久らによって水球チームの GANEFO 参加の手筈が進められていたが、GANEFO 参加を打診された選手たちはどのようにその依頼を受け取り、参加を引き受けたのだろうか。GANEFO 参加に至る経緯を桑原和司、村上(本郷)順三、古川康之の3名は次の通り回顧している。

#### 1-3-1. 桑原和司の場合

1960年に銀行に就職し…平穏な水泳生活に浸っていた時、11月にジャカルタで開催される THE GAMES OF NEW EMERGING FORCES に出場しないか、という誘いの報が齎された。当時は日本の外貨準備は少なく、海外旅行は許可制であった。小学生の頃から海外渡航の憧れは強く、なんとしても勤務先の許しを得て夢を実現したいと思った。コーディネイターの頭山立国氏によれば、在日インドネシア大使の名で、銀行頭取宛に招請状が出されるとの事であったので、それに期待した。受取った頭取は人事部にそれを回した。人事部は、目をつぶってやるから参加しても良いが、1か月も休暇を取る事が、翌年の主任昇格に不利となる影響も考慮の要ありとの判断であった。「主任昇格が1年遅れてもいゝや」と聞き直って私用休暇を取ったが、結果は翌春、昇格を見た

(桑原, 2014, p. 7)

#### 1-3-2. 村上(本郷)順三の場合

私が成城大学を卒業してアミノ飼料(株)(現：伊藤飼料(株))へ入社し、2年目(昭和38年、1963年)の秋風の吹く頃でした。慶応大学水泳部のOBでゴールキーパーの井形さんから『今年の11月にインドネシアに於いて『GANEFO』が開催されるので、日本代表水球チームを結成して参加して欲しい』との話がありました…そこで、今回のガネフォ選手団の団長である『頭山立国氏』(戦線右翼の巨頭、頭山満の孫で慶応大学出身、アジア青年同盟)が、事務所…へ水球チーム結成にあたり「ガネフォの開催趣旨やその背景を」個人的に聴きに行きました…その話を聞き、私なりに参加すべきかどうかを検討した…当時伊藤忠商事(株)から当社に Outreach していた古川欣一取締役業務部長(私の直属の上司)にガネフォに参加する事は、どのような影響があるのか? また、どうすれば良いか? を相談した。数日後、その回答は次のようであった。『日本の総合商社としては、対インドネシア(スカルノ大統領)との友好関係の維持、継続、発展を望んでいる事からインドネシアに協力し参加することは望ましい事であり、伊藤忠商事(株)としても今後の取引上、参加・協力した方が有利になると思う』と言って、参加する事に何の抵抗も無く、逆に参加する事を勧められた(村上, 2014, pp. 34-35)

#### 1-3-3. 古川康之の場合

私のガネフォは、菅久先輩の一本の電話から始まりました。「ガネフォに参加するからお前も来い!」先輩の命令なので「はい、行きます!」と返事はしたものの、初めは「外国に行ける」「外国のチームと試合ができる」「外国を見聞できる」という単純な気持ちからでした。ガネフォの事が理解出来たのは3~4日経ってからでした…当時、私は大手証券N社に入社して3年目でした。会社の水泳部に所属しており、部員の中に来年の東京オリンピックに出場内定の選手も居り、私が参加する事で大変な迷惑をかける、どうすべきか葛藤し、悩みました。しかし、菅久先輩の「我々は、インドネシアとの架け橋になるぞ!!」との熱い思いに胸を打たれ、「人生は一度だけだ、行動するのは今しかない!」と自分に言い聞かせ、決意を新たにしました。退職を覚悟で、水泳部長で、直属

の上司でもあるG課長に事情を説明し、自分の決意を述べたところ、なんと、快く了解してもらい「胸を張って行って来い」と激励され、45日間の有給休暇と会社からの餞別支給の手配までしてもらいました(古川, 2019, p. 52)

海外渡航への憧れや、井形や菅久からの誘いからGANEF0参加を了承したことが伺える。またそれぞれ勤め先はどこも長期休暇を許可してくれた。

#### 1-4. 水球チームの確定

上述した3人はGANEF0参加に対する障壁がなかったことを物語っているが、一方で山本はとあるOBから「電話があり『わかっているだろうけど参加するな』と言われた」(山本, 2014, p. 3)という。日本水連は日体協の決定に従ってGANEF0参加を拒否している。日本水連の決定を破ってGANEF0に参加しようとする彼らに対し、参加を辞めさせる動きがあったのである。ただ山本の場合は、こうした事態を想定していたようで、自身は参加しないことを事前に決めていた<sup>注6)</sup>。しかし同じく慶應義塾大学出身であり当初メンバーに入っていた井形はこうした事態に参加を見送ることになる。井形のポジションはゴールキーパーであり、不参加になるとチーム編成ができなくなる可能性があった。そこで新たにメンバーとして加入したのが日本大学出身で、京都に住んでいた房野康滋であった。房野を誘ったのは高校の時の先輩である本郷である。

私は『もしも井形さんが欠場となった場合…これではチームが編成できなく成る』と思いました。その時、私の頭に真っ先に浮かんだのが京都・山城高時代に一緒にプレーした1年後輩の『房野康滋さん』でした…早速、房野さんへ電話して「ガネフォ」という大会の話の説明して出場を依頼した所、こころよく了承してくれました(村上, 2019, pp. 56-57)

本郷からの打診に対し「2つ返事」<sup>注7)</sup>で了承した房野はすぐさま東京へと向かい水球チームに合流した。房野は「京都に居て何も知らず、言われるままに上京してきたら、なんとガネフォチームが東京オリンピック前のスポーツ界を、相当神経質にさせていた様子」(房野, 2014a, p. 23)に驚きを隠せなかった。井形の不参加と房野の加入を経て、10月中旬にGANEF0派遣の水球チームは確定した。

#### 1-5. 日本水泳連盟からの脱退

10月23日、日本水連はGANEF0に参加する選手

表1 水球チーム一覧(古川, 2014, p. 30)

名前	年齢	出身大学	名前	年齢	出身大学
菅久尚武	26歳	中央大学	内田啓一	26歳	日本大学
古川康之	25歳	中央大学	村川吉高	26歳	日本大学
浜野武人	24歳	中央大学	房野康滋	23歳	日本大学
田中信義	24歳	中央大学	酒井哲也	23歳	日本大学
桑原和司	26歳	成城大学	吉田稔	26歳	法政大学
本郷順三	24歳	成城大学	中山光次	26歳	法政大学

がいた場合、除名処分とすることを発表した。これは日体協が各競技連盟にGANEF0に選手を派遣しないよう要請したことに日本水連が呼応したものである。日本水連理事長の根上博は「いったいだれが行くのか雲をつかむような話だが、参加してから問題になるよりも、その前に日本水連の態度を明らかにしておいた方がいいと思う」(朝日新聞, 1963b)と『朝日新聞』にコメントをしているが、水球チームの参加を知ったうえででの発表だったといえるだろう。翌24日に日本水連常務理事会が開催されたが、そこに頭山が現れ、水球チームの連名による脱退届を提出した(読売新聞, 1963)。

#### 脱退届

このほど私たちはインドネシア共和国から新興国競技大会に個人招待を受けました。われわれは日本の未来のため、またスポーツを通じて世界親善のために役立つことと信じ、あくまで個人の資格で参加するつもりであります。つきましては日本水泳連盟には今後いっさいのご迷惑をおかけしないよう、ここに脱退届を提出します(村上, 2019, p. 57)

水球チームは、日本水泳連盟に対し、自分たちの参加が迷惑をかけてはならないという配慮から脱退届を提出した。さらにGANEF0参加チームの名称を新たに「東京水球クラブ」と命名し、「日本の代表でないこともPRしてガネフォに出場する」(村上, 2019, p. 57)こととした。この時、菅久は毎日新聞の取材に対し次のように答えている。

水連から資格を停止されても十三人の結束は変わらない。日本水連に迷惑がかからないように行動する。チーム名も“日本水球同好グループ”で押しとおし、大会当局が日本代表の名前を使うようだったら、出場を取り消すつもりでいる(毎日新聞, 1963)

なお彼らの GANEFO 参加, そして日本水連からの脱退に関して, 4名の出身者が GANEFOへ参加することになった中央大学水泳部OB会(白門水泳会)では, 会長の鷲尾弘賢が以下のような見解を述べている。

わたしは新聞をみて今回のことをはじめて知った。彼らは新興国競技大会に参加するということを軽い気持ちで考えていたのではないか。…中大水泳部は水連の支配下にある。したがって水連の出した方針に従うのは当然だ。だからもし参加すれば除名する。ただし個人の立場で行くなら自由だし, われわれにそれを阻止する権限はない(朝日新聞, 1963c)

## 2. 水球チームの GANEFO 参加

### 2-1. 事前合宿と出発

日本水連に脱退届を提出した水球チームは10月下旬に5日間の合宿を実施する(古川, 2014, p. 30)。しかし都内にあるプールは「水連の手が回っており」(村上, 2019, p. 58)使用することが出来なかった。合宿は本郷が「成城時代に合宿練習をした伊豆河津, 峰温泉の菊水旅館の温泉プール(25m)をお借りして」(村上, 2019, p. 58)行われた。この時, 山本は「単身自動車が出来たばかりの伊豆スカイラインを下り慰問に行った」(山本, 2014, p. 3)。

選手団の直前の合宿練習が伊豆の峰温泉で行われた。旅館につき大広間でゴロゴロしている皆の所へずかずかと入り『ご苦労さん』と声をかけた。各学校入乱れてのびっくり顔が面白く, それは訪問客が過去自分一人しか居なかった事を想起させた。プールは小さく, 更に寸法を測って作られたゴール上のロープをみて胸が熱くなった。プールサイドからの叱責ホイッスルの音などは無く, 普段の練習情景とは違って静かなものであったけれど, 一人一人の熱心さはしばらく離れていた水球を自分に復活させようとの願いで, 共感できるものであった。個人が熱心に向上を図る姿は, 大学の練習というより, イタリアのクラブチームの自由練習のような雰囲気で, このリラックス感は国際試合に出るには丁度良いのかなと思い, 急遽作られた新チームがやっとここまで来たかとの思いも込み上げるのであった(山本, 2014, p. 3)

合宿を終え, 11月2日, 水球チームは出発の時を迎えた。出発前には, OBや, 58クラブの関係者が見送りに訪れたという。GANEFOの日本選手団は二便に

分かれて羽田空港から飛び立つこととなっていたが, 水球チームは第一陣に全員搭乗した。

程なく出発前夜となり, 芝の旅館に全員が集合した。集まった選手たちの顔には, もう何の迷いもなく, 晴れ晴れとしていた。訪れた何人かのOBは表立って支援活動が出来なくてもみんな心で応援していた。結果として, いじめてた水連を押し切った選手達であった。集まったOBも壮途を祝った(山本, 2014, p. 3)

ガネフォ水球チーム結成前まで一緒に練習して来た「58クラブ」の人達が, 激励の為に旅館へ来て下さったのは, 本当に嬉しかったことを覚えています(村上, 2019, p. 58)

水球チームが搭乗した第一便はサイゴンを經由し, ジャカルタに到着する予定であった。しかしサイゴン上空で1時間ほど待機した後に, マニラへと進路を変



写真1 羽田空港出発直前

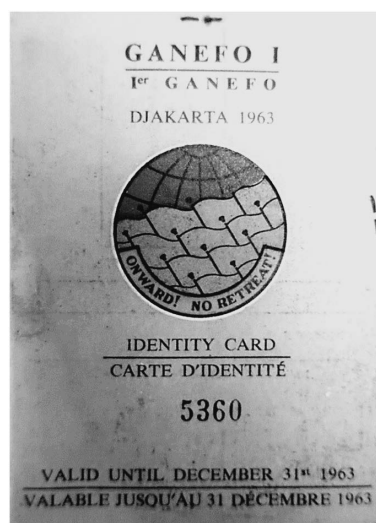


写真2 インドネシア入国用のIDカード

更した。この時、ベトナム共和国ではクーデターが発生していたのである<sup>注8)</sup>。

泥沼のベトナム戦争の幕開けの歴史的な日、私たちはサイゴン上空をグルグル飛んでいたことになる(菅久, 2014b, p. 18)

第一陣に搭乗していた古川はサイゴンが閉鎖され目的地になかなか着かないことから「キナ臭いにおいを感じた」(古川, 2014, p. 31)という。第一陣は真夜中にジャカルタに到着、空港では大観衆が彼らを迎えた。菅久はジャカルタ到着直後のことを次のように述べている。

トラップの脚元からターミナル入口まで、赤い絨毯が一直線に敷かれており、その両側にリッパな人達と大変美しい民族衣装を着た女性たちがニコやかに迎えてくれて、全員、レイを掛けてもらった。空港を一步出ると“ワーン”と言う地鳴りのような歓声と、一万人近いインドネシア民衆に迎えられた。ヒドップ、ジャパン(日本万歳)(菅久, 2014b, p. 18)

桑原はこの時、GANEF0の国家行事としての意気込みを体感していた。

愛国的ジャワ男の大音声による『Hidup GANEF0! Hidup GANEF0! (ガネフォ万歳!)』の高揚・激励の辞を受け、冷静な自分の感覚との乖離を感じた。ロビーで若い娘達から英語による歓迎を受け、国を挙げての大会である事を実感した(桑原, 2014, pp. 7-8)

また、吉田稔は到着時の印象を次のように回顧している。

ジャカルタまでの飛行機はプロペラ機で、香港、マニラ経由でジャカルタ到着が真夜中であったこと。空港から選手村までのバスからは街に並んで歓迎してくれる現地の人々の顔が黒くて、やけに眼だけがキラキラ光っていたのが印象的だった(吉田, 2014, p. 43)

## 2-2. ジャカルタ滞在

### 2-2-1. 選手村と練習

空港に降り立った選手たちはバスに乗り選手村へと向かった。選手村は前年に開催されたアジア大会でも使用されたものであったが、菅久はその「設備があま

り良くない」(菅久, 2014a, p. 15)のものであったと感想を述べている。選手村内には銀行、郵便局、商店街そして診療所<sup>注9)</sup>が設けられていた(内田, 2019, p. 42)。部屋は複数人で1室を使用し<sup>注10)</sup>、部屋に冷房はなく蚊帳が張られていた。冷房がなくても過ごせた人もいたが<sup>注11)</sup>、人によっては暑さにやられた<sup>注12)</sup>。選手村の食堂ではインドネシア料理、中華料理、西洋料理の3つが提供され、水球チームはこの内、中華料理をよく食べていたが、どの料理も調理にヤシ油を使っており、彼等には合わなかったようだ(桑原, 2019, p. 46)。「下痢」になる選手が続出したという(菅久, 2014a, p. 15)<sup>注13)</sup>。また「早朝からイスラム教のコーランの大音響で起こされた」ことで、古川は「こんな環境の所が選手村であっていいのか!!!」(古川, 2014, p. 31)と書き残す。毎日のように汗をかき、蚊に刺されたところを搔けば、掻き傷に蠅が止まる。水は「ほんのり茶色」がかかっており、「下着は洗濯のたび、日毎に茶色っぽくなっていった」(吉田, 2014, p. 44)。慣れないジャカルタでの生活に田中信義は体調を崩し、7日間の入院を余儀なくされた(古川, 2014, p. 31)。水球チームは到着2日目から練習を開始し、バスで市内の練習用プールへと向かい「生ヌルイ水の中で毎日2時間練習をした」という(桑原, 2014, p. 8)。ただ突然の練習時間変更が多く、計画



写真3 GANEF0の横断幕(ジャカルタ市内)



写真4 GANEF0の看板(ジャカルタ市内)



写真5 選手村入村式



写真6 水球チームの通訳



写真7 Mohamet Himawanとの記念写真

道から流れ込む側溝にまたがりしゃがんで用を足しつつバスに手を振る人達。全く東京での生活では想像もできないほど、あまりにもかけ離れた状況に驚いたものだった(吉田, 2014, p. 43)

選手村では商店や土産売りの商人を相手にショッピングができた。商人とは「物々交換」も行われ「MADE IN JAPANは大人気」(房野, 2014a, p. 23)であったという<sup>注14)</sup>。また「インドネシアの高校生、大学生が物珍しそうに我々の部屋を訪ねて来る」(桑原, 2019, p. 46)こともあったようで、房野はMohamet Himawanという少年と仲良くなった。その少年とは大会終了後も文通を続ける仲となった<sup>注15)</sup>。他にも現地の人との交流の話題は事欠かない<sup>注16)</sup>。

選手村近辺での交流だけでなく、インドネシア政府関係者との思い出についても確認しておく。菅久は「インドネシア政府の役人スマクノ氏」が「私達と同行しながらメイドバイジャパンと誇らしく言って」(菅久, 2014a, p. 14)いたこと、「大使館の某氏」が「アジアの先進国である日本が今、インドネシアに対する『賠償』で、その国家的プラスをかりうじて守っているが『賠償』問題が終結した場合、今後の具体案が無い現状では残るのはスポーツである」(菅久, 2014a, p. 14)と語ったこと、そしてマラディースポーツ大臣の次のような発言を記憶している。

インドネシア共和国は、アジアの先進国である日本の参加をこれほど嬉しく心に強く思ったことはない。これに対する私達のお返しは1964年東京オリンピックの成功に協力する意味で、純粋な気持ちから参加するであろう(菅久, 2014a, p. 15)

を立てるのが困難であった(菅久, 2014a, p. 15)。

## 2-2-2. ジャカルタでの生活

多くの選手にとってインドネシアは初めての海外渡航であった。選手村から練習場への移動の際や自由時間に、選手たちはジャカルタという異国の地を目で見て、肌で感じた。選手たちの目に映るジャカルタの風景は日本で見る風景とは別世界のものであった。

市内を流れる河、そこで洗濯している人、泳いでいる人、その前をプカプカとウンチが流れている。そんな事お構いなく知らん顔している人々を見て、私はド肝を抜かれました。まさに別世界だと痛感(房野, 2014b, p. 26)

ジャカルタの街は赤茶色の川とその川で洗濯し、水浴びする人々。少し離れたところでは、側



菅久は「インドネシア人は日本選手に対し友好的です」(菅久, 2014a, p. 14) との印象を抱いていた。また水球チームはインドネシア滞在中、在インドネシア日本大使館で幾度か開かれたパーティーに出席した。在インドネシア日本大使であった古内広雄は涙を流しながら選手たちを歓迎したという<sup>注17)</sup>。パーティーではおにぎりが振舞われ、ジャカルタでの慣れない食生活が続く選手たちにとって非常にありがたいものであった<sup>注18)</sup>。

GANEF0 開催を控え、慣れない異国の地での生活が続く中、大会前夜にはある事件が発生した。GANEF0 の前夜祭において各国の参加選手が歌を披露することになり、水球チームの出番が回ってきた。この時、水球チームが披露したのが「支那の夜」であった。

古川君がリーダーとなり、歌い始めるやいなや、中国の作業員2名が目を吊り上げ、血相を変えて飛んで来た。私の胸ぐらを掴みワーワーとなる。超満員の会場は一瞬水を打ったように静まりかえった。両国の通訳が間に入り、作業員が言っていることは、中国『貴国は支那と言う、日帝時代の地名をあげ、我が国を侮辱した。よって正式に陳謝せよ』日本『我々は、歌の詩の中にある支那と言う幻の国を歌った』『ベチベチ、ガーガー』『この共産党員の馬鹿野郎ヤルカーッ』となった。その時ワキ腹に何か冷やりと痛みを感じる。いつの間にかインドネシア兵士4、5名が、私と中国共産党野郎を銃剣で突いている。(銃剣の先は丸い) インドネシアの将軍が中に入って、両者は引下がった。私達は2度、支那の夜を歌ってやった。聴衆も大喝采、痛快であった(菅久, 2014b, p. 18)

### 2-3. GANEF0 開催

11月10日、GANEF0 の開会式が行われた。水球チームも開会式に参加し、入場行進を行った。水球は大会の後半に実施されることとなっていた。会場は開会式を行ったスタジアムに隣接するプールである(桑原, 2014, p. 8)。

水球は日本の他に、インドネシアとアルジェリア、アルゼンチンが参加した。中でもインドネシアは前年開催のアジア競技大会で日本代表が1-0という接戦で勝利していたことから、「現在の日本ナショナルチームと力は互角と見なければならず、相当激戦となるものと覚悟しております」(菅久, 2014a, p. 14) として、インドネシアとの一戦は「事実上の優勝戦」(菅久, 2014a, p. 14) と考えられていた。選手たちの記憶に多く残るのもこのインドネシア戦である。インド



写真8 GANEF0 メインスタジアム全景



写真9 入場行進前(参加各国プラカード)



写真10 「日本」選手団入場行進 (GANEF0 開会式)

ネシア戦では相手のラフプレー、そして審判のインドネシアびいきがひどかったという。桑原は「彼らの水中での余りにも汚く、ヒドいプレイに、ハーフタイムの時、菅久がレフェリーにインドネシアの水中プレイを観客注視の中で実演し、苦情申立をしたが受入れられなかった」(桑原, 2014, p. 8) と回顧している。こ

のインドネシア戦を房野は「社交試合だった」と意味付けて折り合いをつける。

まずインドネシア戦に同国人の審判が笛を吹くと言うのがおかしい。我がチームは攻撃なんて全くできず、相手にただしがみつかれて身動きもできない。審判はそれを全て黙認するのですからたまったものではない。話にならない。私も一度反則の合間にゴールポストを放棄して、泳いで審判の居る所まで行きあまりにもひどいやり方に抗議しましたが、審判は半ばおびえているように見受けられた。ただ、ARE YOU CAPTAIN?と繰り返すのみ。これじゃあダメだと仕方なく引下がりましたが、インドネシアチームに勝ってほしいと言う周りのプレッシャーを強く感じました。終わった瞬間これでいいんだと思わず思いました。インドネシア選手も水から出て来て、全身の力を込めて勝ったと喜び両手を挙げて天に向かって叫んでいました。私達とは全く違った大きなプレッシャーをかけられていた事は一目瞭然。これで全てが丸く収まったとも言うべきだったのでしょう(房野, 2014c, p. 28)

水球チームはインドネシアに敗れたがアルジェリアには勝利した。総合成績は1位インドネシア(3勝0敗)、2位日本(2勝1敗)、3位アルジェリア(1勝2敗)、4位アルゼンチン(0勝3敗)<sup>注19)</sup>という順位となった(アカハタ, 1963)。2位となった水球チームは「オリンピックに負けないリッパな銀メダル」(菅久, 2014b, p. 19)をスカルノ大統領から渡された。

選手の一部は水球の試合に出場するだけにとどまらずに大会に関わった。中山光次は水球の「国際審判員(自称)」(桑原, 2014, p. 9)を名乗り、アルジェリア-アルゼンチン戦で笛を吹いた。この試合ではアルゼンチンの放ったシュートをめぐって判定が紛糾したが、中山は「審判会議に於いて、確信を持って『No goal』の判定を宣し、会議を収束させた」(桑原, 2014, p. 9)という。また酒井哲也は100 m自由形にもエントリーし「ラストの10米で失速」(酒井, 2014, p. 11)したが58秒0で6位に入賞する。古川康之も400 m自由形にエントリーし「善戦したが」(古川, 2014, p. 32)決勝に進出することは出来なかった。

11月21日、GANEF0は閉幕した<sup>注20)</sup>。選手たちは帰国までの間、スカルノ大統領主催のパーティーやインドネシアの水球チームと共に観光に出かけ東の間の休暇を楽しんだ。11月23日にスカルノ主催のパーティーが開催された時のことを桑原は次のように語る。



写真11 水球チーム集合写真  
前列左から吉田, 村川, 内田, 房野, 酒井  
後列左から桑原, 中山, 菅久, 田中, 本郷,  
古川, 浜野(ガネフォ会, 2018, p. 4)

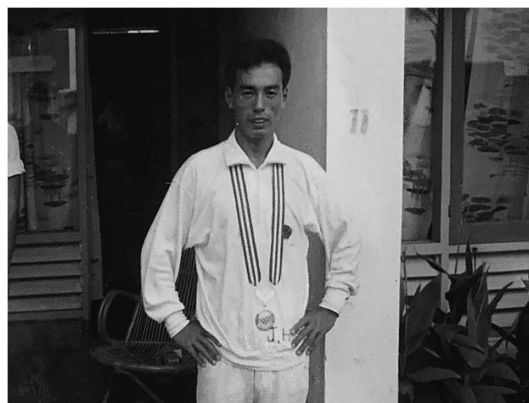


写真12 銀メダルを付けての記念写真 本郷順三



写真13 GANEF0の銀メダル

大統領は上機嫌でダンスをしたり、日本語で「愛国の花」を口ずさんだりしながら、各国選手と会話を始めたので、自分も傍に行き、大会の成功を祝い、招かれたことの謝辞を述べた(桑原, 2014, p. 9)



写真14 スカルノと話す桑原 (桑原, 2014, p.9)



写真15 インドネシア水球チームとの集合写真  
(※写真は11及び14を除いて村上(本郷)順三氏所蔵のものである)

桑原によれば、翌24日には「バスで東部に向かい、ブンチャク峠を越え、高原の古都、バンドンに行き、有名な国際会議場を見た」(桑原, 2014, p.10)という。11月29日ジャカルタを発った水球チームは香港を経由し、11月30日、羽田空港に到着した(古川, 2014, p.32)。

### 3. 帰国とその後

#### 3-1. 「決意文」

GANEF0終了後、彼らは今後のことをどのように考えていたのだろうか。そのことの一部を伺うものとして「決意文：東京水球クラブの今後について」というものがある。これはGANEF0からの帰りに菅久が機内で、選手それぞれに書かせたものである。メモ用紙に自由記述された内容は、大会直後の彼らの雰囲気伝えるものである。「決意文」で多くの選手に共通する内容が日本水連への復帰と定期的な会合の開催という2点であった。

GANEF0参加の際に脱退届を提出したとはいえ、それは日本水連に迷惑をかけないための方策として行われたものであった。まずは水連への復帰を目指す。

そのことが水球チームの総意であったと考えられる。そして中には復帰が叶うとも叶わずとも日本における水球の発展に尽力することを願うものもいた。例えば吉田は「復帰出来た時は58 [58クラブ—筆者注]の流れを汲む社会人クラブとして大いに水球を通じての交友、親善を日本のクラブチーム普及に盡すべき」(吉田, 1963)と書き残す。また浜野は「たぶん水連への復帰はだめであろう。しかしやれるだけの声をかけ、だめなら、この東京水球クラブは現在のカタチをそのまま保ち、日本水球界の特異な存在として我々の初心である水球発展の為につくそう」(浜野, 1963)と記した。桑原も「今後に於ける我々の務めは自分たちの結束と行動とに自信を持ち、大乗的な立場から後進を指導し、また揺るぎない信念のもとに水球発展の礎石となることである」(桑原, 1963)としている。

定期的な会合については年に2回集り「海水浴及び、忘年会等で励しい楽しむ会をもうけたい」(村川, 1963)や「正月、シーズン初め、シーズンオフ」(本郷, 1963)の年に3回集まるであるとか、「月に一度とか二月に一度でも互いに会って、話しあう機会を持つ」(古川, 1963)や、また「本クラブの組織を水球だけに止めて置かず機会あるごとに皆んなが集まりお互いに和気合々と社会生活にプラスになる様な風にもっていつてはどうか」(中山, 1963)など、頻度や集りの意図は様々であった。

志を一つにして約一ヶ月共に異国に暮した者同士、死ぬ迄 Tokyo water polo Team のペナントの元にどんな環境にあらうとも堅く結びついていたものだ。帰国した後、何回か全員集まってその時の幹事 etc 協力の事項を取り決めて、今後の在り方を皆の前で確認し合いたいものだ(吉田, 1963)

東京 water polo の今後の核心は団結あるのみである。周知の通り我々は団結でガネホに参加し大役を果たした。この自信と人間関係を持続させるのみ。団結は言葉では簡単だが個々の生活環境が十人十色で非常に難しく忍耐と努力が必要となって来る。我々は若い、大いに会社の考え次第に転職が待っておりちりぢりになり仲々集合のチャンスがない。そんな時我々の近況を知らせる事により親密さを保つ意味から同人雑誌でも発刊すれば良い。出版幹事は一人一人交代して平等にされる(田中, 1963)

なんらかの形で水球チームの活動を継続したいということもまた総意であったといえよう。

### 3-2. 水連からの除名

1964年2月1日に日本水泳連盟の昭和39年度全国理事会が開催された。理事会ではGANEF0に関する議題がのぼり、次のように決議した。

[GANEF0には——筆者注]体協及び加盟団体は参加しない方針であったが選手個人に対する呼びかけに応じた者が若干いた。水泳関係では12名の水球選手が水連の注意にも拘らず、参加したので水泳連盟としてはこれ等の選手達のアマチュアリズムを認めず、今後の競技には選手としても役員としても認めないことにした(日本水泳連盟, 1964, p. 129)

翌2日に開催された昭和39年度冬季定例代議員会議においてもGANEF0に「水球関係が12名参加したがこの人達に対してはアマチュアリズムに違反したものと今後選手としても役員としても競技に参加することに許可しない」(日本水泳連盟, 1964, p. 134)ことが決議された。こうしてGANEF0に参加した12名は日本水泳連盟から除名されることとなったのである。村川は、GANEF0に参加して以降、日本水連の仕事から外されたという。

当時私は、鷗田監督、神田ヘッドコーチと一緒に東京オリンピック候補選手の強化合宿にコーチとして同行しておりました…この時期にガネフォの話が持ち込まれ、私は詳しく覚えていませんが、ガネフォに出場することになりました。すると、水連から水球委員を除名され、その後水連の仕事は一切なくなりました(村川, 2019, p. 45)

彼らの除名処分が解除されるのは8年後のことになる。1972年10月に日本水連は水球委員長小谷氏および水球委員会了承の元、12名の日本水連復帰を決めたのであった(内田, 2019, p. 42)。

### おわりに

水球チームは頭山立国ルートによる選手集めの中で編成されたものであり、これまでの研究が言及してきた柳川-宮澤ルートとは別のルートの存在を本稿は明らかにすることができた。

水球チームの中心人物であった菅久は、GANEF0が世界の、日本のスポーツ界が抱える問題を克服するための大会だと認識し、その「布石」となるべく参加を決め選手集めに協力した。彼は自身も所属していた58クラブのメンバーに声を掛けたわけであるが、各人の回想を見ると、その参加経緯は海外旅行への憧れ

や菅久からの一言で決めるなど様々に語られている。大会に参加するためには日本水連を脱退しなければならない。このことは今後日本において大会に出場することが出来なくなることを意味していた。アスリートとしてある種、極限の選択を迫られている中であったとはいえ、GANEF0参加に対する使命感だけでなく素朴な動機も伺えるのは興味深い。また参加に際し、それぞれ所属していた企業が有給休暇を与え、さらには饞別まで与えたところもあったというのは重要である。日体協や日本水連は許可しなかったが、それぞれが所属していた企業は参加を許可した。水球チームの場合は日本水連から脱退して参加を図った以上、所属する企業の理解というのは大きな手助けとなったといえる。

最後に、本稿が手がかりとした2冊の記念誌はGANEF0開催から50年以上経過して作成された。『懐かしのガネフォ(GANEF0)[ガネフォ50周年記念改訂版]』の「編集後記」には「50年前の事でも良く覚えておられ、編集・校正しながら記憶の正確さ、豊かさに感嘆しました」(桑原ほか, 2014, p. 54)と各人の記憶力—その「正確さ」と「豊かさ」に対して編集委員の率直な感想が書き残されている。一方で次のような記述も確認できる。

何しろ50年前の事を思い出して書いて頂きましたので、当時の思い出のうち、年月日、数字、場所、名前等については、その人によって他の人と違っている場合がありますが、たとえ事実と違っていてもその人の思い出を大切に、尊重して、寄稿された原文のとおりとしました(桑原ほか, 2014, p. 54)

「正確さ」と相反するような記憶のズレである。「豊か」であるがゆえに編集の過程で出てきたそれぞれの記憶の差異の存在を彼らはここで率直に告白している。このことは文献を基にした事実の再構成という歴史学的手法を用いた本稿にとって、その根幹となる史料の危うさを意味している。この点は本稿の抱える限界であり、今後その差異の検証が必要となってくる。

ただし、このことが2冊の記念誌の史料的価値を著しく損なうことを意味するのではないと筆者は考えている。なぜなら彼らは記憶の差異を認識しながらも、それをどれか一つの「事実」に修正しようとはしなかったのだ。それぞれが50年という歳月と共に抱え込んできた記憶に対し、無下な態度をとりたくないという思いから「たとえ事実と違っていても」寄稿はそのまま掲載したのである。

こうした彼らの実践そのものも今後の検討課題であ

る。そこで問われるべきは何が事実か、ということではなく、とある経験がいかにして歴史として育まれるのか、という記憶と歴史の関係性それ自体であるということは言を俟たない。

## 謝 辞

本研究はJSPS科研費JP20K19550の助成を受けた。またガネフォ会のみなさまには本稿の作成にあたり多大なるご協力を頂いた。ここに記して御礼を申し上げる。

## 注

- 1) GANEF0に関する先行研究としてはLutan & Hong (2005), Gitersos (2011), Connolly (2012), Shuman (2013), Field (2014), Friederike (2017) が挙げられる。
- 2) 日本が参加したのは柔道, ヨット, 卓球, 水球, 空手, バドミントン, レスリング, ボクシング, 陸上, フェンシングである。
- 3) この他にGANEF0と日本の関係について言及したものとして, 波多野 (2004) と浦辺 (2019) が挙げられる。
- 4) なお宮澤も, 頭山が選手集めを行っていたことを指摘しているが「どこから引張ってきたのだろう」(宮澤, 2005, p. 38) とそのルートについてまでは言及していない。
- 5) 酒井によれば「菅久さんは浜野さんの中大の先輩でありリーダーとしてよくまとめて頂きました」(酒井, 2014, p. 11) とのことである。
- 6) 村上によれば山本は「最初からOBの圧力をキャッチしており, ガネフォに出場できないとの事で陰に回って我々を応援して下さいました」(村上, 2019, p. 56) と回想する。
- 7) 房野康滋から村上(本郷)順三宛のメール(2020年2月3日)。
- 8) 南ベトナムでは情勢悪化が続いており, 11月1日, アメリカの支援を受けた軍部によってクーデターが決行され, 翌2日にはベトナム共和国初代大統領となったゴ・ディン・ジェムと秘密警察長官のゴ・ディン・ニューが殺害された。
- 9) 診療所には「内科, 外科, 歯科, 10床の入院ベッドが設置されて」(内田, 2019, p. 42) いたという。
- 10) 部屋割については1部屋6人説と1部屋2人説がある(桑原, 2019, p. 46; 内田, 2019, p. 42)。
- 11) 桑原は「夜は思いの他涼しく, 冷房不要で安眠できたのは驚きであった」(桑原, 2019, p. 46) と回顧している。
- 12) 房野は「暑さに閉口 夜暑くて寝られなかったのが問題でしたね。ベッドは汗でびしょり体の形の地図が出来るほど。涼さを求める一心でシャワーを浴びても出る水は気温と同じく温かく役に立たない。あれは閉口しましたね」(房野, 2014b, p. 26) と回顧している。
- 13) 酒井はこうした食事情に備えてインスタント食品を持ち込んでいたという。「まわりの人達から日本食が食べたくないと聞かされ, あの頃出始めた即席ラーメン, 即席味噌汁を持って行って食べましたが, 量が少ない為

すぐ無くなり残念に思いました。でもあの時の旨さは今でも忘れられません」(酒井, 2014, p. 11)

- 14) また吉田によれば「選手村でのショッピングはルピアで, 1ドル¥360レートで持っていったドルをインドネシアの選手たちに頼んでオフィシャルより数倍高井1,000ルピアで闇交換をし, お土産を買った」(吉田, 2014, p. 43) という。
- 15) この文通は1965年に房野が日本を離れるまで続けられた(房野, 2014a, p. 24)。
- 16) 例えば「バスの運転手, 小柄な気さくな人でした。戦争で日本軍支配下の経験があり, それを話してくれたりして日本語で『なんだ——お前は!』なんて日本人上官にビビらされたこと」(房野, 2014b, p. 26) を話してくれたこともあったという。
- 17) 古内の思い出は次の通り書き残されている。「古内大使が涙しながら, 我々のガネフォ参加を喜んで朝まで唄って歓迎して下さいました」(古川, 2014, p. 31) 「大会期間中, 古内駐在インドネシア大使には, 物心両面から大変お世話になりました。我々選手に, 現地邦人の心からの感謝の言葉を涙ながらに語られ, 過大なご支援をいただきました」(内田, 2019, p. 42) 「古内駐在インドネシア大使が涙を流し, 君達が来てくれなければ, 在インドネシア邦人は大変なことになったと心から喜んで頂いた。」(菅久, 2014b, p. 18)
- 18) 「あの, おにぎりの味が忘れられない。大会開催中に3度もパーティーを開いて頂いた」(古川, 2014, p. 31) 「日本大使公邸で久しぶりの銀シャリを戴いたり」(村川, 2014, p. 42) 「日本大使館でのおにぎり味噌汁の美味しかったこと」(吉田, 2014, p. 45)
- 19) アルゼンチン対アルジェリア戦ではゴール判定をめぐる紛糾した。この時主審がアルゼンチンのゴールを認めず, アルゼンチンは試合を棄権する。アルゼンチンは以降の試合も出場せず最下位となる(桑原, 2014, p. 8)。
- 20) なお閉幕直後に突如飛び込んできたJ・F・ケネディ暗殺のニュースは彼らに衝撃を与えた。「当地日付11月23日(アメリカでは22日)ケネディ大統領がテキサス州ダラス市内行進中に銃撃・暗殺されたとの報を聞いた。大変衝撃的なニュースで, 市民も暗澹たる気持で弔意を示した。選手村も市内の官公署も至る所で半旗を掲げた」(桑原, 2014年, p. 9) 「『ケネディーが死んだ』日本大使館から連絡があった。2年後にスカルノが失脚した一連のインドネシアの共産党によるクーデター前夜のジャカルタは, 騒然としており, 肌に突刺さる緊張感があった。情報がコントロールされており, 国外の動向は全く判らない。日本大使館が唯一, ニュースの窓口であった」(菅久, 2014b, p. 16)

## 文 献

- アカハタ (1963) ぞくぞく記録更新水泳 日本フェンシングに善戦, 11月22日付8面 東京。
- Shuman, A. (2013) Elite Competitive Sports in the People's Republic of China 1958–1966: The Games of the New Emerging Forces (GANEF0). JSH, 40(2): 259–283.
- 朝日新聞 (1963a) 新興国大会への不参加を要望, 10月8日付13面 東京朝刊。

- 朝日新聞 (1963b) “参加すれば除名”, 10月24日付13面 東京朝刊.
- 朝日新聞 (1963c) 新興国大会に菅久氏らが参加すれば除名, 10月26日付13面 東京朝刊.
- Connolly C. A. (2012) The Politics of the Games of the New Emerging Forces (GANEFO). *IJHS*, 29(9): 1311–1324.
- Field, R. (2014) Re-Entering the Sporting World: China’s Sponsorship of the 1963 Games of the New Emerging Forces (GANEFO). *IJHS*, 31(15): 1852–1867.
- 古川康之 (1963) 決意文：東京水球クラブの今後について.
- 古川康之 (2014) ガネフォの思い出. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 30–31.
- 古川康之 (2019) 『ガネフォ』随想. ガネフォ会, ガネフォ 1963への想い, pp. 52–54.
- 房野康滋 (2014a) ガネフォ 50年記念. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 23–25.
- 房野康滋 (2014b) インドネシアの思い出—2. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 26–27.
- 房野康滋 (2014c) ガネフォ 50周年記念誌を読んで. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 28–29.
- ガネフォ会 (1963) ガネフォ 1963への想い.
- Gitersos, T. V. (2011) The sporting scramble for Africa: GANEFO, the IOC and the 1965 Africa Games: *Sport in Society*, 14(5): 645–659.
- 浜野武人 (1963) 決意文：東京水球クラブの今後について.
- 波多野勝 (2004) 東京オリンピックへの遙かな道：招致活動の軌跡 1930–1964. 草思社：東京.
- 本郷順三 (1963) 決意文：東京水球クラブの今後について.
- 桑原和司 (1963) 決意文：東京水球クラブの今後について.
- 桑原和司 (2014) GANEFOの思い出. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 7–10.
- 桑原和司 (2019) ガネフォの思い出. ガネフォ会, ガネフォ 1963への想い, pp. 46–47.
- 桑原和司・古川康之・村上 (本郷) 順三 (2014) 編集後記. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, p. 54.
- Lutan, R. and Hong, F. (2005) The politicization of sports: GANEFO—A case study. *Sport in Society*, 8(3): 425–439.
- 毎日新聞 (1963) 新興国スポーツ大会に水球の13人が参加, 10月25日付13面 東京朝刊.
- 宮澤正幸 (2005) GANEFO その周辺：インドネシア変革期におけるスポーツ事情と拓殖大学の関係. 拓殖大学創立百年史編纂室：東京.
- 村上 (本郷) 順三 (2014) ガネフォの背景と出発前. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 34–37.
- 村上 (本郷) 順三 (2019) ガネフォに感謝. ガネフォ会, ガネフォ 1963への想い, p. 56.
- 村川吉高 (1963) 決意文：東京水球クラブの今後について.
- 村川吉高 (2014) ガネフォ大会参加から半世紀を迎えて. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 41–42.
- 村川吉高 (2019) ガネフォ参加前後の記憶を辿って. ガネフォ会, ガネフォ 1963への想い, pp. 44–45.
- 中山光次 (1963) 決意文：東京水球クラブの今後について.
- 日本水泳連盟 (1964) 水泳, 156–157.
- 酒井哲也 (2014) ガネフォの思い出. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 11–12.
- 戦後外交記録 (1963) 日本からの GANEFO 参加者リスト DAFTAR PESERTA GANEFO DARI DJBPANG 1 NOPEMBER 1963. 新興国競技大会 (GANEFO) 関係 (一九六三年於ジャカルタ). I.1.10.0.8 (マイクロフィルム番号 I-0122), 外務省外交史料館.
- 菅久尚武 (2014a) GANEFOに参加して (遺稿). 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 13–15.
- 菅久尚武 (2014b) ケネディーの死・あのとき (遺稿). 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 16–19.
- 田中信義 (1963) 決意文：東京水球クラブの今後について.
- 富田幸祐 (2018) 新興国競技大会 (GANEFO) における日本選手団参加問題と日本政府：外務省外交史料館所蔵史料を手掛かりとして. *体育学研究*, 63(2)：707–721.
- Trotier, F. (2017) The Legacy of the Games of the New Emerging Forces and Indonesia’s Relationship with the International Olympic Committee. *IJHS*, 33(12): 1321–1340.
- 頭山立国 (2019) 友好と信頼を築いたガネフォ. ガネフォ会, ガネフォ 1963への想い, pp. 5–7.
- 内田啓一 (2019) もうひとつのオリンピック (GANEFO). ガネフォ会, ガネフォ 1963への想い, pp. 41–43.
- 浦辺 登 (2014) アジア独立と東京五輪. 弦書房：福岡.
- 浦辺 登 (2019) 幻のオリンピック・ガネフォ. 福岡地方史研究：福岡地方史研究会会報, 57：23–38.
- 山本 健 (2014) ガネフォへの想い. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 1–4.
- 読売新聞 (1963) 水連脱退, 新興国大会へ, 10月25日付8面 東京朝刊.
- 吉田 稔 (1963) 決意文：東京水球クラブの今後について.
- 吉田 稔 (2014) 1963.11.GANEFO THE Iの思い出. 日本水球チーム, 懐かしのガネフォ (GANEFO) ガネフォ 50周年記念改訂版, pp. 43–46.

〈連絡先〉

著者名：富田幸祐

住所：東京都世田谷区深沢 7-1-1

所属：日本体育大学オリンピックススポーツ文化研究所

E-mail アドレス：k-tomita@nittai.ac.jp